生体れき断

下山事件の真相

平　正一

生体れき断

下山事件の真相

平　正一

毎日学生出版社

生体れき断　下山事件の真相

昭和39年7月5日　発行

380円

著　者　平　正　一

発行者　林　宗　宏

発行所　毎日学生出版社
東京都中央区銀座西 8—10

印刷所　図書印刷株式会社

落丁乱丁がありましたら，お取りかえします

目

次

1 総裁失踪 五
2 専用車発見 一三
3 無惨なれき死体 二〇
4 社会情勢 二八
5 特別取材班 三四
6 死後れき断 四〇
7 単独行動 四六
8 疑惑 五七
9 捜査（1） 六八
10 捜査（2） 八六
11 事実誤認 一三一
12 法医学論争 一六六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

13　初老期うつ憂症　一九五
14　総裁就任　二〇七
15　孤独　二三〇
16　その日の総裁邸　二三六
17　最後の合同捜査会議　二三三
自他殺の法医学的判定
特に下山国鉄総裁変死についての批判　中館久平　二三八
あとがき

1　総裁失踪

日本国有鉄道総裁秘書の大塚辰治君は、時計の針が八時四十分を指すと大急ぎで裏玄関に飛んで行った。総裁は、毎朝八時四十五分から九時までの間に裏玄関から登庁するのがならわしになっているからである。

しかしこの日、総裁下山定則氏は九時十分を過ぎても姿を見せなかった。大塚君が秘書室に帰って総裁邸に電話をかけてみると

『いつものように八時十五分ごろ出かけました。途中、寄り道でもしているのではないでしょうか』

と、こともなげな芳子夫人の返事だった。そういえば、出勤途次の用足しもないことではなかったが、きょうは大塚君は落ちついてはいられなかった。午前九時から局長会議が開かれる予定であったし、すでに加賀山副総裁をはじめ、各局長が総裁室に集っている。さらに、それが終ると、十一時にはGHQ（日本占領軍総司令部）訪問の予定があったからである。それに、予定変更の場合は、きまって電話連絡をしてくるのが総裁の常であるのに、その連絡がきょうはなかった。

そのきょうというのは、昭和二十四年七月五日、吉田第三次内閣が日本の自立経済確立のために、官公庁職員一六万五〇〇〇名の行政整理を断行する、と声明を発表してからわずか五日目の、物情騒然の時であった。

しかも、国鉄は日本の行政史上未曾有の大整理の先頭に立って、全整理人員の五分の三に当る九万五〇〇〇名をかく首しなければならなかった。しかも、その第一次整理該当者三万七〇〇名の発表を行なったのは、きのうの午後三時半であった。

発表と同時に、各鉄道局からはクシの歯をひくように労組の不穏な動きが報告されてきた。曰く

「退職辞令と退職金の交付拒否」

「退職者の職場立入禁止無視、職場密着」

「総辞職」

「実力行使」

福島管理部では、整理発表を阻止しようとする組合員によって公安官が暴行を受け、郡山駅では、退職辞令と退職金を届けに行った管理部員が、実力をもって追いかえされたという報告もきていた。一触即発の感じさえする時であった。

大塚君は同僚の木内秘書と手分けをして、首相官邸や総理府をはじめ、警視庁、警察庁、あるいは政府要人の公邸やGHQ関係まで、かねて備えつけてある重要番号簿にある関係先には、すべて問い合わせてみたが、そのどこにも総裁は姿を見せていなかった。

局長会議は終ったが、中央のイスは最後まで空席のままだった。

総裁秘書室にはようやく不安の色がただよいはじめ、こんどは総裁の個人的関係者、親戚、友人、あるいは貸席や料亭にいたるまで、心あたりのあるところには残らず連絡してみたが、やはり何も得るところはなかった。

午前十一時、加賀山副総裁は斎藤国警長官に連絡して、内々の捜査を依頼したのち、秘書室長の田坂泰廸氏を伴って、GHQにヘブラー労働課長を訪ね、総裁に代って国鉄整理についての報告を行なった。

新聞社の出勤はいつも遅いものだが、私がいた毎日新聞社には、この日は早朝からの出勤者が多かった。きょうこそは人員整理に抗する組合員によって、何か大事件が起こされそうな不安があったからである。しかし、この朝は案に相違して平穏に過ぎ、張りきった若い記者たちは多少拍子抜けの形だった。

ちょうど正午ごろ、警視庁とつながる直通電話のベルが鳴った。各新聞社は一般電話のほかに、警視庁との間に直通電話を用意している。いざ大事件という場合には、一般電話では頼りないし、分秒を争う職場だからである。

デスクのS君が受話器を取り上げた。デスクというのは、その日の取材責任を持つ副部長のことである。

そのS君は、そのころ同僚から「当り屋」という異名を奉られていた。S君がデスクについた日に限って、奇妙に大事件が突発するからである。福島県平市の警察署が共産党員によって占拠された事件もそうであったが、東京都における公安条例反対デモで、デモ隊の橋本金二君が死亡したのもS君のデスクの日であった。だから、彼は仲間から「お祓いをやれよ」とからかわれていた。

受話器を握りしめたS君の眉根に深いシワが刻まれている。向い合わせにいた遊軍のK君とY君が、肩をつつき合って笑っている。二人はすでに何事かが、どこかで発生していることを感じとっているのである。

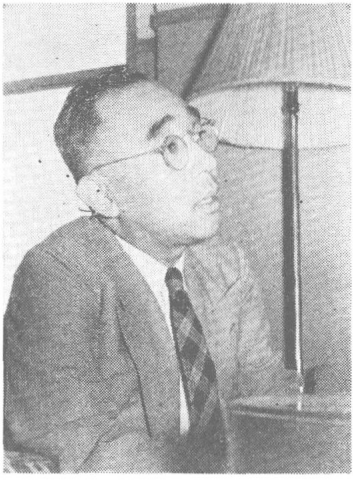
『ヨシ、あとを頼むぞ』

ガチャンと受話器を置くと

『国鉄本部、荏原方面、大至急!』

と、どなった。

これは国鉄本部と、荏原方面の警察を担当する記者を大急ぎで電話に呼び出せ、ということである。



下山国鉄総裁

サッと殺気に似たものが流れた。しかし彼は、ククッというような特徴のある笑い声をたててから「やっぱりおれはお祓いをやらねばいかんわい」と首をふっていた。K君とY君が説明を求めるように顔をつき出したが、それより早く、国鉄担当のN記者が電話口に出た。

『下山も加賀山（国鉄副総裁）も現在本庁にいるか。国鉄幹部が一人行方不明になっているはずだ。ボヤボヤするな』

毎日新聞の社会部には、きょうは万一を警戒して、遊軍のほとんど全員が顔をそろえている。それに、数日前から社会部に見習いとして配属された新入社員一一名が、あっけにとられながら、それでも緊張した顔を並べていた。これだけの人員があれば、どんな大事件もやってのけられる、と自信を深めたのであろう。S君は一人でうなずいていた。

その時、荏原方面担当のH記者が電話に出た。H記者は入社後一年に満たない若い記者であった。S君はH君の担当地域内にある下山総裁邸について調査を命じた。

総裁はけさ何時に家を出たか。どんな服装であるか。最近総裁の身辺に変ったことはなかったか。けさ面会の

予定者はなかったか。彼はかんでふくめるように調査の要点を指示した。

『君にとっては初めての大事件だよ。慎重にやれよ』

この日は、警視庁担当の記者たちの出勤も早かった。彼らは、出勤するとさっそく庁内の各部課を歩きまわり、異常の有無を確かめることからその日の仕事を始めるものであるが、事件によっては厳重に秘匿されることもしばしばである。だから、彼等は雑談のうちにも常に相手の顔色をうかがい、言葉の裏にひそむものを読みとろうとする。

ところで、総監室を訪れたM記者は、総監室を出てあわただしく立ち去った警備部長と、刑事部長のうしろ姿を見送って首をかしげた。

何かあるぞ！

彼は、総監室と刑事部長室、警備部長室を何度か往復して、国鉄幹部の一人が早朝に自邸を出たまま、十一時近くなっても登庁していないことを知った。これが下山総裁失踪に関する第一報であった。

あとでわかったことであるが、この朝十時半、田中総監のところには「総裁がお伺いしていないか」と国鉄秘書室からの問い合わせがきていた。田中総監はその数日まえに、労働攻勢の矢面に立つ下山総裁の身辺を案じて「護衛の警官をつけたいが……」と申し入れたことがある。その時は、総裁が丁重に辞退したのでそのままになっていたが、すでに第一次整理が発表されたあとでもあり、組合の反撥も予想されるので、きょうは総裁の意思に反しても護衛をつけようかと考えていた。その矢先の問い合わせだっただけに、総監は「もしや？」という不吉なものを感じていた。そこに斎藤国警長官から「総裁が行方不明らしい」と伝えてきたのである。だから、警視庁では万一の場合に処するために、ひそかに協議を続けていたところだった。

国鉄本庁担当のN記者から、Sデスクに調査報告の電話があった。

下山総裁がけさから姿を見せない。

幹部は不吉なものを感じている。

総裁は、朝九時からの局長会議への出席と、十一時からGHQ訪問の予定があった。

各新聞社はまだなんの動きも見せていない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

S君は以上の報告を聞き終ると

『君の方には自動車を廻しておく。あとの情報をたのむ』

と、いって電話を切った。そして自動車部に国鉄本庁に行って待機してくれるように連絡した。

続いてH君からも報告がはいった。

総裁は午前八時二十分少し前に自邸を出た。

自動車は四一年黒塗りビュックNO41173。運転手は大西政雄。

総裁の身辺に変ったことはないが、最近不眠に悩まされていた。

芳子夫人は鎌倉の知人を訪ねて不在。

家族は特に不安には思っていない。

けさの会見予定者は不明。

下山邸は案外のんびりしているようであるが、国鉄と警視庁は緊張している。ことに不審なのは、GHQの訪問予定があるにもかかわらず、総裁から何の連絡もないことである。だが、白昼、東京のド真ん中で、全国民注視の的である国鉄総裁が、自動車もろとも消えさるということは、どうにも考えられることではない。

Y君は、S君に命ぜられて号外原稿を書いた。もう一時である。

事件記者は全能力をあげて仕事ととり組み、そして激甚な競争から生ずるスリルを糧として生きる動物である。それ故に、号外戦ともなれば分秒を争い、社の名誉と、記者的生命を賭けるものである。

他の新聞社は、まだ総裁の行方不明を知ってはいないようである。いま号外を出せば、圧倒的な勝利は明らかである。

国鉄幹部は不吉な予感に襲われており、非公式ながら国警への捜査も依頼している。号外を発行していけないという理由はどこにもない。だが、総裁が自邸を出てからはまだ五時間を経過したに過ぎない。どんな思いもかけない事故のために、登庁が遅れていないとも限らない。

号外原稿は活字に組まれた。矢はつがえられた。いまはもうその弦を引きしぼればいいのである。

午後二時、田坂秘書室長はCTS（占領軍交通監理局）にシャグノン中佐を訪ねてその旨報告した。同時に芥川鉄道公安局長は警視庁に田中総監を訪ね、実情を述べて極秘の捜査を依頼した。

毎日新聞編集局

これによって、総監は原交通警備部長、坂本刑事部長と協議の上、堀崎捜査第一課長に捜査を下命した。堀崎課長は刑事部第二号室主任の関口警部補を捜査主任に特命し、自ら指揮をとった。

本来ならば、これは家出人の捜査であって、兇悪強力犯をとり扱う捜査一課がタッチすべきものではなかったが、当時の社会情勢はそれを許さなかった。田中総監は事態を重大視したのである。

関口主任は直ちに大田区上池上の総裁邸に芳子夫人を訪ね、最近における総裁の言動、外部からする脅迫等の有無、その他健康状態などについて問いただしたのち、都下全警察署に対して、総裁専用車捜索の指令を発するとともに、交通事故と行路病人の有無、病院、診療所における不時の加療者等についての厳密な調査を命じた。

編集局の中心にあたるあたりに、真っ白な、大きな柱がある。何の飾りもないその柱に、ただ一つだけ黒い押ボタンが植えつけてある。それは緊急な号外発行を社内の各部局に知らせる、それだけの目的のために用意されているボタンである。このボタンが押されると編集、印

刷、営業のいっさいの業務はいったん停止されて、号外発行のために総力が結集される。事件担当のわれわれはそのボタンの誘惑を感じながら、一方では「総裁発見」の快報がはいってこないかと希望をつないでいた。

警視庁には、管下七三署から続々と報告が寄せられた。

「総裁専用車41173号発見せず」

「四一年ビュックの事故なし」

「管内病院入院患者に該当者なし」

ちょうどそのころ、UP通信（いまのUPI）の記者がやって来た。UP通信社は毎日新聞社との特約関係で、その日本における総局を毎日新聞社の六階においていた。

『下山総裁の失踪の原因について情報があれば教えてほしい』

単刀直入の申し入れである。

特ダネとばかり思いこんでいたわれわれにとっては青天のへきれきともいえる驚きであった。UPは毎日新聞社と特約しているだけではなく、共同通信社とも特約関係にある、アメリカの世界的大通信社である。もしUPの通信が出れば、それは直ちに全国の新聞に電送される。いや、世界のすみずみまで、そのニュースが行きわたるのにも数時間とは要しないだろう。万事は休すである。号外は直ちに発行されねばならない。

だが、下山総裁失踪の号外発行は、たださえ不安な社会情勢にさらに拍車をかけることになるおそれもある。われわれはニュースの勝敗にのみこだわっていてよいだろうか。

われわれは彼にいってみた。

『われわれは、下山総裁を失踪と断定してよいかどうかについて、まだ迷っている。いましばらくUP通信の発行を待ってもらえないだろうか』

『その時間はすでに過ぎた。これほどのビッグ・ニュースをジッとあたためておく理由はない』

剣もほろろの返事であった。彼は日本人ではないのである。日本国民が抱く不安について考慮を払う必要を感じないのである。

さらに悪い情報が重なった。M君の何度目かの電話である。

『朝日も読売も活動を始めている。NHKは五時のニュ

ースの時間に放送するといっている』

つづいて国鉄のS記者から

『国鉄本庁は午後五時、総裁失踪を正式に発表することに決定した』

と、知らせてきた。

号外原稿にはさっそく「午後五時国鉄発表」の文字が記入された。

O整理部長が立ち上がって、背後にある柱のボタンを力強く押した。

輪転機はうなりを生じて回転をはじめた。

2　専用車発見

新発足の国鉄初代総裁として、国民大衆の前に大きくクローズ・アップされ、暗雲低迷のさなかにいま九万五〇〇〇名にのぼる職員の大整理に着手したばかりの、下山総裁の突然の失踪は、八八〇〇万の国民とその政府に大きなショックを与えた。国民の誰もが戦慄すべき犯罪を想像しながらも、一方では八の字眉の人なつかしそうな下山総裁が「いやどうもお騒がせして……」と恐縮しながら現われるのではないかと期待していた。

号外を発行して一息入れているところに、国鉄担当のN記者から「総裁専用車が発見された」と知らせてきた。

『運転手の大西政雄が、いま、電話で連絡してきた。彼は三越本店の南口出入口に、総裁の帰りを待っているそうだ。ぼくはこれから三越に行く。写真班を三越によこしてくれ』

ソレッ！

本社からも記者とカメラマンが三越本店に向けて飛び出して行った。一足おくれて、さらに二名が国鉄本庁に向って飛んで行った。三越本店か、国鉄本庁で大西運転手をキャッチしようという二段の構えである。だが、記者たちがかけつけたときは、大西君はすでに国鉄本庁の木内自動車主任に伴われて、本庁に連れもどされたあとであった。大西君はそこで鉄道公安官の簡単な取調べを受けたのち、警視庁からかけつけた金原係長に伴われて、身柄を捜査本部に移された。下山総裁失踪の鍵を握るただ一人の人物と見られるだけに、その取調べは厳重を極めた。

大西君の供述はこうであった。

――午前八時十六分、上池上の総裁邸を出発して、五反田から品川経由、御成門前まで来たとき、総裁は

『佐藤さん（佐藤栄作氏のこと）のところに寄るんだった』

と、いった。

『引き返しましょうか』

下山総裁専用車　円内は大西運転手

『いや、よろしい』

御成門から田村町、日比谷を通って、和田倉門前にさしかかった際

『買物をしたいから、三越に行ってくれ』

と、いった。そこを右折すると、すぐ本庁前に出るのだが、大西君は直行して次の大手町都電停留所を右折した。そのとき、総裁は

『きょうは、十時までに役所に行けばいいから……』

と、つぶやくようにいった。車が東京駅北側の国電ガード下を通るとき

『白木屋でもいい、真っすぐに行ってくれ』

白木屋の角まで来て見ると、まだ表の鉄扉は閉ったままである。

『まだ、開店していませんね』

『うん』

大西君はそのまま車を三越に向けた。三越もまだ開店していなくて「午前九時半開店」の木札がぶらさがっていた。

『開店は九時半ですね』

『うん』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com